

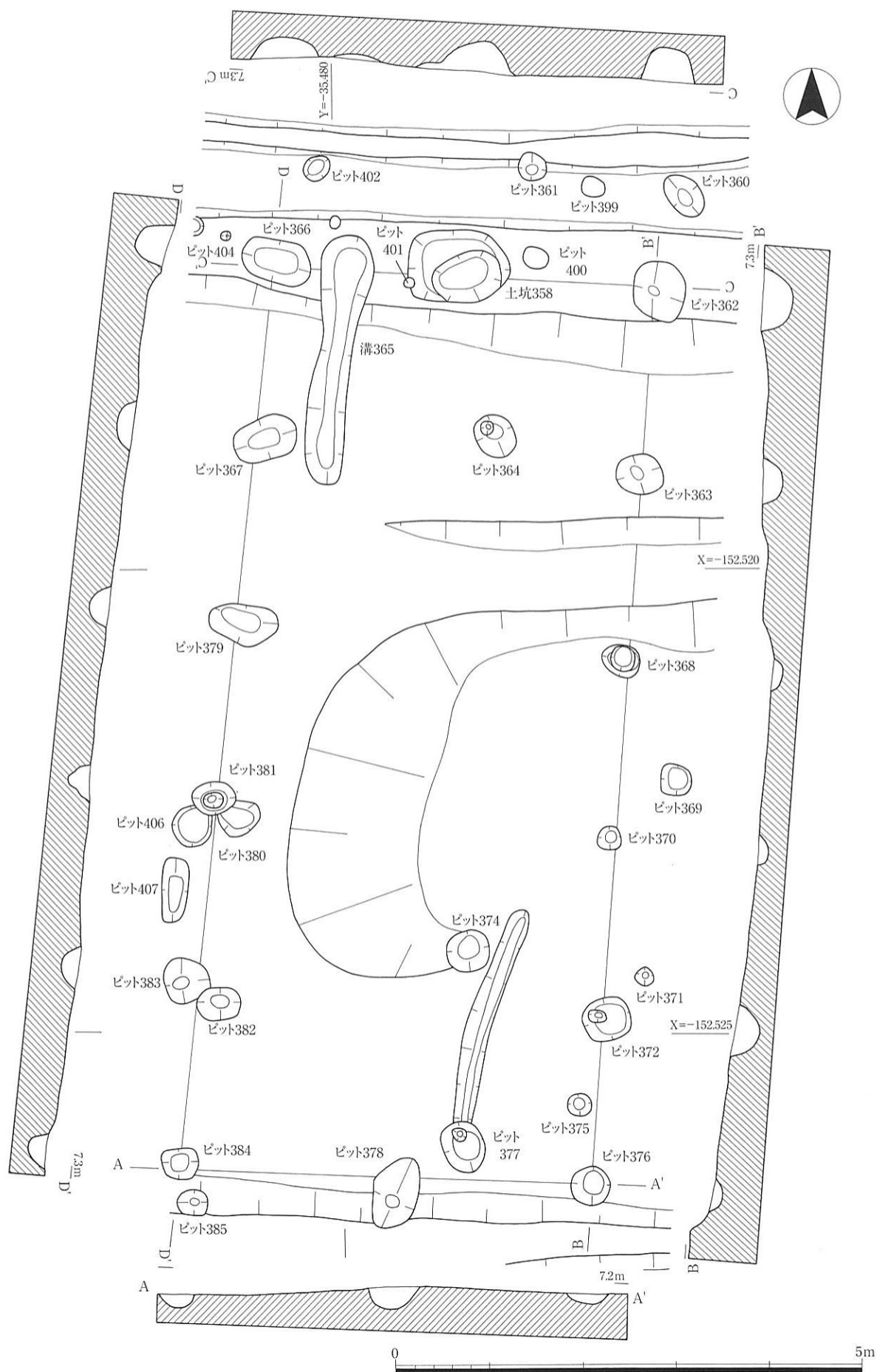


図17 第三面 98-6区 掘立柱建物937

土坑452（図15）は土坑443の西に隣接する。出土遺物は瓦器14片（うち12世紀代2片）、黒色土器B類1片・A類2片、須恵器26片（うち奈良時代1片、古墳時代中期5片）、土師器67片（うち平安時代10片）、弥生時代後期の土器2片、計112片で、平安時代後期に位置づけられる。

土坑502（図16）は98-3区西部に位置する。長径4.9m、短径でも4.5mあり、今回の調査では最大の土坑である。白磁1片、瓦6片、瓦器77片（うち12世紀代12片、11世紀代2片）、黒色土器B類4片・A類2片、須恵器126片（うち東播系20片、平安時代前期2片、奈良時代2片、古墳時代中期17片）、土師器194片（うち平安時代60片）、計410片出土し、平安時代後期と考えられる。

土坑722（図16）は98-7区北部に位置する。埋土が5層に分かれる。12世紀代の瓦器1点、黒色土器A類2片、須恵器2片、土師器6片（うち平安時代2片）、計11片で、平安時代後期と考えられる。

掘立柱建物937（図17）は98-6区北東部に位置する。主軸は北からわずかに東に偏する。現状での建物西面のピット366からピット384までの底面レベル（T.P.+6.74～6.88m）と各ピットの西側の攪乱除去部分のレベルを比較すると、ピット382・383以外はいずれもピットの底の方が低い。また、建物東側でも現状の南東隅のピット376から1間分東側ではピットが検出されず、調査区東辺の側溝断面にもピットはかからない。以上の2点から、梁行2間×桁行5間の掘立柱建物と考えられる。柱間は最小1.8m、最大2.3mだが、1.9～2.0mが多い。梁行4.3m（北辺4.1m、南辺4.4m強）、桁行9.7m（東辺9.6m、西辺9.8m）で、面積約41.7m²。北面中央の柱穴は特に大きく、土坑358とした。建物北側のピット360・361・402が、位置と母屋の柱穴に比べて小振りなことから北面庇を構成する可能性がある。各ピットの埋土は単層、柱痕や根石もない。建物を構成する各ピットから須恵器や土師器が出土し、10世紀前後の平安時代前期の所産である。

落込み341は98-4区西部にある。周辺の溝群と同様に北北西-南南東にのびる。長さ20.3m、幅2.5～3.8m、深さ約90cm。埋土は断面図（図5）のG層。出土遺物は中世陶器？2片、緑釉陶器2片、灰釉陶器1片、瓦21片、瓦器169片（うち13世紀代3片、12世紀代53片）、黒色土器B類20片・A類26片、須恵器201片（うち東播系1片、奈良時代6片、古墳時代中期78片）、土師器518片（うち平安時代101片）、奈良時代の製塩土器2片、須恵質土管2片、萬年通寶1枚、土製円板1片、韃羽口1片、サヌカイト剥片1片、計968片で、平安時代後期と考えられる。

落込み359は98-6区東部に位置する。第Ⅱ層を掘削した結果、南北幅9.7～10.1m、最深部で44cmの落込みとなった。周辺の溝群との関係から、東西方向に主軸をもつ幅広い形状と推定する。灰釉陶器1片、瓦5片、瓦器13片、黒色土器A類3片、須恵器201片（うち東播系1片、奈良時代5片、飛鳥時代1片、古墳時代後期2片、同中期12片）、土師器384片（うち平安時代14片）、軟質系土器1片、弥生時代後期の土器1片、奈良時代の製塩土器7片、焼土2片、計618片出土し、平安時代後期と考えられる。

3）奈良時代（図18） 奈良時代と考えられる遺構には、川2条、井戸3基、土坑（井戸）1基がある。

川が98-7区と98-5に流れる。旧楠根川との関係から川の上流は南であろう。川719は98-7区南辺（図5のJ層）で幅6.5m、深さ60cm。西岸は北北西にのび、98-5区川200の西岸につながる。東岸は北北東に開くが、周辺調査区の状況から、やはり川200の奈良～平安時代部分の東岸につながると考えられる。

川200では特に施設などは認められないが、川719では川中央部に南北に木杭や石による護岸的な施設（図19）が存在した。それらは、川719～川200の主軸が北北西-南南東なのに対し、南北方向に並ぶこ

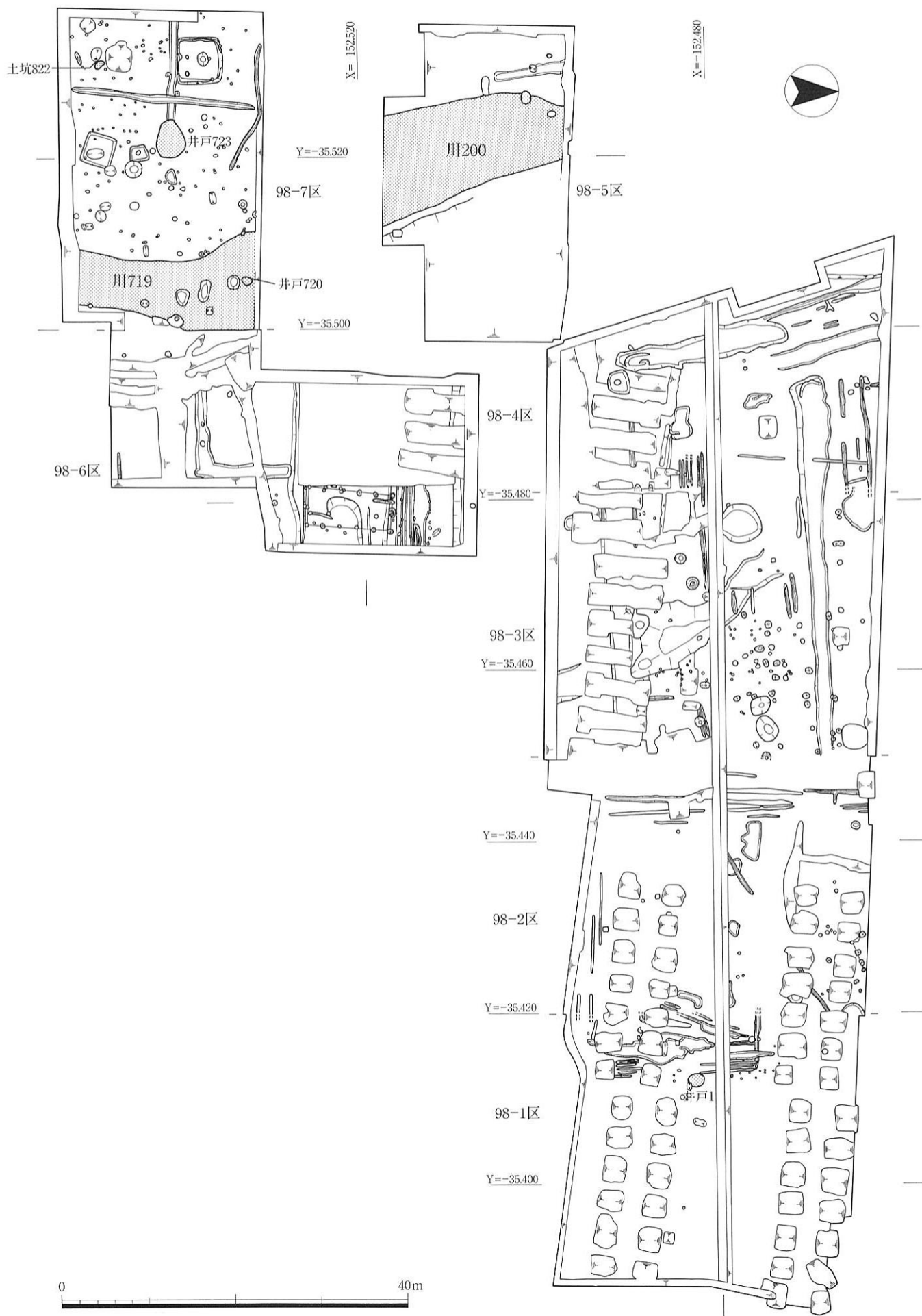


図18 第三面 遺構配置図 (奈良時代)

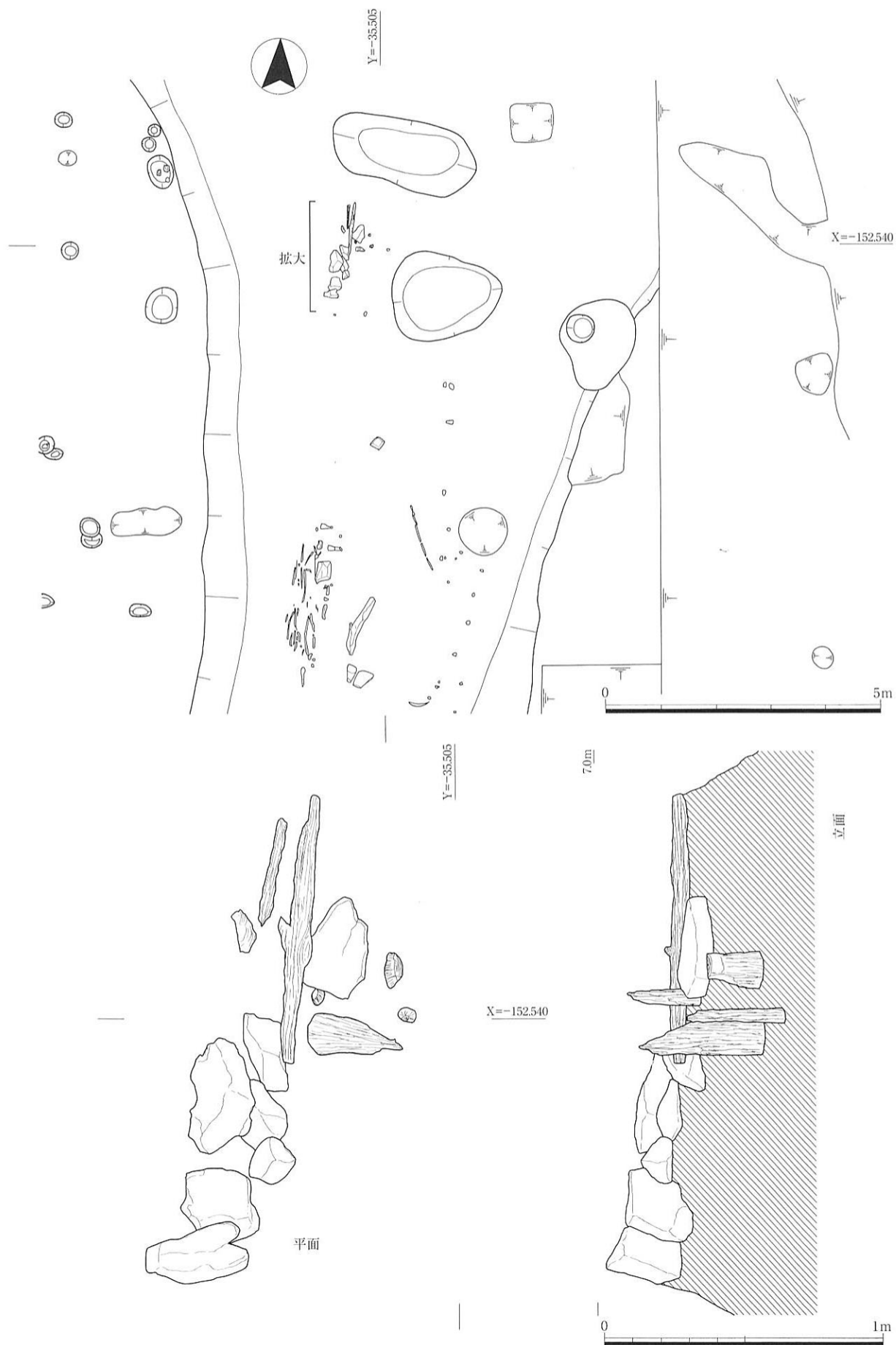


図19 第三面 川719 護岸施設